

要するに本書は秀れたルネサンス文化研究者たりしアルセル氏の論文集としてルネサンス研究者の熟讀すべきものである。

(Verlag von Benno Schwabe & Co. Basel, 1932, LX+359 Seiten 16 M.) (監見)

●列國史
叢書 亞米利加史

淺野利三郎著

三省堂發行にかゝる列國史叢書の一つとして、著はされた本書は、上・下二篇より成り、上篇に於て、著者は「アメリカ植民地時代から建國時代へ」の概況を、下篇に於ては「アメリカの國民的發展時代から帝國主義時代へ」の概觀を試みてゐるが各篇各々九章にわかたれ、其發展過程が略々年代順に記述されてゐる。

即ち、上篇第一章に於ては、著者が「商業資本が新市場を開拓する必要と希求」に驅られた事を以て、其「決定的要因」(一四頁)としてゐる新大陸の發見、並びに其結果としての歐洲列國、殊に西班牙の植民地經營の状態を、第二・三・四章に於ては其後遅ればせ乍ら馳せ參じた、而も「直に現在の住民並富源を利用し得べき地方のみを植民的活動の對象とした」其等初期植民地經營とは異なる「自己の勞力によつて他日初めて農業的工業的富力を生ずべき空地の占領を企圖し」(五八頁)「植民地將來の發達を阻碍するが如き性急な經濟的掠奪を行ふ」(五七頁)を排撃せる英國の植民地經營の跡が、而して第五・六章に於ては其必然的結果としての「事實上恰も一の獨立せる國民を形成

するが如き状態を(さへ)呈」(一一二頁)するに到つたアメリカ植民地人の「經濟的、社會的、文化的諸方面」(同頁)に於ける驚く可き躍進振り、従つて其は、勢ひ本國支配階後との對立激化を醸成し、遂に「經濟的原因」を「最も重要な原因」(一一三頁)として勃發するに到つたアメリカ獨立革命の過程が、而も一第七章に於ては、其に成功せる同國の運命は、列國、殊に英國の強烈なる壓迫があつたにも不拘、其直後勃發せるフランス大革命並に其に引續く大戦亂中、同國が「唯一の主要なる中立國として交戰國植民地間の貿易の主要なる擔當者」となるの好條件に恵まれたが爲、同國の「通商及び海運は、爲めに最も急激且つ顯著なる發達を遂」(一六七頁)ぐるを得、其後歐洲の戦雲漸くおさまり、再び、列國の對米政策が積極的となるに及んだ後と雖も、同國の資本主義は「世界の寶庫とも言ふべき」偉大なる「自然の力」(五三頁)に幸されて、愈々着實なる發展の跡を辿るを得、遂に「モンロー主義」の宣言をなすに到つた過程を、而して第八章に於ては、其發展の跡を殊に工場制度の内に見ると共に、其結果としての「自由貸銀勞働に基礎を置く近代資本主義經濟」(二二頁)に立脚せる北部と「Cotton King」と謳はれたる棉花栽培に、奴隸制度を以てせる南部との諸對立、その爆發としての南北戦争の概説がなされ、最後の第九章に於ては「神話傳説の無い」(二二四頁)アメリカ文化の發達が植民時代・獨立革命時代・建國時代の夫々について述べられてゐる。

下篇第一章第二章は専らアメリカの國民的發展時代の叙述にあてられ、「南北戦争が北部に與へた主要な結果は、産業革命の發展テンポの促進であつた」(二五〇頁)とし南北戦争を一つのターニング・ポイントとして、其以後のアメリカ産業の急速なる發展、従つて又アメリカ西漸の急進に伴ふ所謂邊疆地方の消滅過程を述べると共に、第三章に於ては「二十世紀の開始に至るまでは、アメリカ人の努力は、殆んど全く國內資源の開發に注がれてゐたと言つて過言ではない」(二九四頁)と言ひつゝ、彼のモンロー主義の本質は「決して絶對の孤立主義を提唱したのではなく、國內の充實を計る爲め暫く外國との關係を避け専ら力を内治に傾け、他日大に雄飛する謀を爲さればならぬと言ふのであつて、アメリカが十分成長した曉に或は進取主義となり、或は帝國主義と」(二九五頁)なり得る可能性を有つものなるを説き、既に此時代が帝國主義への過渡期的段階に到達せるものとして、其對カナダ政策等を擧げ、第四章「アメリカ帝國主義の發達の項に於ては、其對極東並に南米政策の強行を述べてゐるが、第五章以下第八章迄は、主として其の歐洲大戰への參加、並に其を契機として「ヨーロッパ列國が只管戦争中心の生産に其の精力を集中し、日常品は勿論軍事品の缺乏をも感じつゝある間に、大西洋の此方アメリカの産業界は其等諸國の缺乏を充足し各國植民地半植民の需要に應ずるために目覺しい發展を遂げ、遂にニュー・ヨークが世界資本主義の中心となり」(四三三頁)「全然面目を一新し世界各方面に向

つて愈々傍若無人の弗外交政策」(三九八頁)を採るに到つた所以、而してその具體的表現としてのワシントン會議・シユネーグ三國會議・ロンドン會議並に世界經濟會議に於ける其の活躍振りを述べると共に、其等國際的協調主義も畢竟「各國利害關係の對立」(五三〇頁)の故を以て不成功に到らざるを得ず「この時に當つて世界經濟會議を開くことは恰も世界經濟の自環を葬ふ爲めに鐘を撞くに似たるものがある」(五三〇—三一頁)とさへ極言し、最後の章は「現代アメリカ文明の矛盾とユダヤ人問題」に就いて論ぜられてゐるが、下篇の方が、より詳述されてゐるのは、著者自ら其の序の中に於て言へるが如く「一九三六年を目標とする我が國現代の非常時局の認識を一般に深からしめんことを期した」(自序四頁)が爲であらう。惟ふに吾國の所謂非常時なるものは、其の最大關聯の一つを彼の帝國主義アメリカに於て有つからである。

以上、私は、甚だ簡略ではあつたが、其の内容の紹介に貴重なる紙数を費した。

だが、果して此著をなすに當つて、著者が「非常時局の認識を一般に深からしめん事を期した」其意圖が達せられたか否か。其の答は一にかゝつて此の著が「歴史科學性」の前に於て如何なる價值評價を受けるかの中に存する。

未だ、赤兒に等しく「當時のヨーロッパの三等國」(一九四頁)に過ぎなかつた新興アメリカ合衆國が、堂々宣言するに到つた彼の有名なる「モンロー主義」の成功が、歐洲列國の對立、

均衡、その結果としての「新世界に於けるヨーロッパ列強の無
力」(一八四頁)の所爲であつたと共に、又「イギリスと默契
があつ」(一九四頁)たが爲でもあるとせるが如く、既に世界
經濟時代に入れる十九世紀の各國史の眞の理解の爲には、常に
當時の世界狀勢を認識する必要があるを教示すると共に、其外交
史研究に於ても、唯徒らに公文書によつてのみ理解解釋するの
危険を戒しめたるが如き、洵に科學的なる方法論の適用は隨所
に見得らるゝと言へ、其概念の科學的嚴密性を缺けるを認め
ざるを得ないのは遺憾であるが、それにもまして私が全篇を道
じて受けた最深の印象は、著者が素朴なる唯物論者の態度を採
つて居られると言ふ事である。斯る私の印象が、果して何を意
味するかは、偏に讀者の此書の精讀に俟つが、兎もあれ、著者
が「アメリカ人は日本の開國の恩人など言ふ外交的措辭を避
け」(自序三頁)出來得る限り批判的に而も歪曲する所なく觀
察せんとせられた限りに於て、アメリカ史の眞相が或程度迄描
かれてゐる事は事實であり、此方面に於ける入門書として一讀
の價値はあらうと思ふ。(定價貳圓八拾錢)(杉本克己)

●京都帝國大學文學部史學科昭和八年度卒業
論文題目

國史專攻

- 近世封建社會と町人 青山 喬
- 徳川時代封建制度精神と宗教との關係に就て 藤田貞吉郎
- 奈良平安過渡期の時代精神 東伏見邦英
- 三教と町人精神 本谷一郎
- 近世と古學派儒教 岩城隆利
- 明治維新に於ける國學 岩瀬英治
- 淨土教興隆の史的意義 眞利安一
- 平安朝末期に於ける庶民階級の女性 野中正祥
- 上代社會と歌謡 多田傳三
- 近世の都市生活 櫻井文三
- 淨土教の發達と庶民 櫻井景雄
- 奈良朝に於ける農本思想と庶民生活に就て 茂川眞澄
- 石門心學と町人 橋川眞澄
- 南北朝時代に於ける勤王思想に就て 多賀文雄
- 莊民の生活 高井悌三郎
- 長崎の勃興と地役人の成立 高石綱